

第7号

発行

小松同窓会本部

〒923 小松市丸内町二ノ丸15

石川県立小松高等学校内

編集人 宮崎 榮



感激に

みちたる句をば叫ぶ時
自づと涙ながれし頃よ

北村 喜八

(中学15回)

日韓関係の未来

伊藤忠商事ソウル支店長

坂井 光男

今年七月二度目の海外駐在でソウルに赴任した。商社に勤務して三十年。多様な業務で多く国々を相手に色々な経験をしてきたが、その中で今、私にとって最も身近でエキサイティングな隣国韓国の話題を御紹介したい。

去る十一月七日、韓国の古都慶州で細川首相と金泳三大統領のトップ会談が開かれた。冒頭首相より創氏改名、その他具体例を挙げて過去の謝罪があり共同記者会見で大統領は「過去を克服し未来指向の関係を築こう」と発言した。韓国のマスコミは細川さんの率直な発言と謙虚な態度を歓迎した。日本でも首相帰国後のリサーチで細川支持率は七〇%と相変わらず高く、慶州での謝罪に対する日本人の不快感が想像より低いことを示した。

「これを契機に真の善隣友好関係を」というのがマスメディアの論調であった。「近くて遠い国」と言われて久しく「反日」と「嫌韓」の感情は両国の若手に特に強い。この状況は両国にとって不幸であることは明白だ。

韓国では今年二月、三十二年振りに文民政権、金泳三政権が誕生し、対日

方針は「過去固執」から「未来指向」へ激変した。経済面でも従来の日日差別措置は撤廃ないし大幅改善策が打出され、韓国離れが進む日本との関係修復努力は本物だ。日本側もこれは望むところでここに来て政財界の交流は極めて活発化しており、両国の友好関係強化の期待を抱かせるに充分なものがある。

ただソウルにいて両国民の意識のズレの大きさを日常的に見ているとまだまだ山あり谷ありと言わざるを得ない。一つは韓国人の外に対する過度のナショナリズムと被害者意識と優越感の振幅の大きい交錯感情でありこの意識改革には時間がかかる。一方で大いに気懸りなのは日本の平和ボケ、成金ボケである。韓日関係への韓国人の関心の異常な高さは時に日本人を憂鬱にするが、日本人の朝鮮半島に対する無理解、無関心も大きな障害になる。ソウルの緊張感と東京ののどかさ。わずか海峡を一つ隔てただけでこの落差。世界がどのかなら日本のこのどかさは確かに快適だが現実に残念乍らそうでない。

首脳会談の直後、金大統領の外交問題のブレンソン教授及び日本人ジャーナリストで辛口の韓国ウオッチャーK支局長の三人で飲んだ時の会話の一部。S教授 「日本人は紛争回避型。スミマセンが口癖だが本当は意外に根に持つ。韓国人は紛争解決型。すぐカッ

となつて喧嘩するがその後酒飲んで仲直りする。」

支局長 「その割りには何時迄も日帝三十六年を持ち出すのはキツ過ぎる。」

S教授 「細川さんの謝罪で許してくれたと思つたら間違いだ。韓国人の受けた心の傷はもっと深い。」

私 「日韓はジョークでお互い相手の痛い所をチクリと言ひ合える関係が理想。お互いマジメ過ぎると良くない。」

S教授 「両国は似た所も多いが気質、文化、伝統の違いは大きい。同じと錯角して余り近づくと喧嘩になる。少し距離を置いて付合つた方が良い。」

私 「南は北に甘過ぎないか。対韓テロを忘れたのか。それとも北が恐いのか。」

支局長 「日本人には分りにくいけれどは民族の血だ。血は水より濃い。あの気の強い韓国人も北の同胞の話には必ず涙を流す。」

隣国韓国との関係強化は両国のためのみならずアジアの安定、APECの健全な発展のためにも欠かせない。日本と北朝鮮とは未だ戦後が未解決である。この難しい外交問題の解決にも、北の核問題結着のためにも日韓の協力は不可欠な前提である。

世界のどの民族もヒューマンビーイングとして全く変らない。人種、宗

教、文化、伝統、習慣などの違いは大きいがそれを理解し互いに相手の立場を尊重して理性的に話合えばどんな厄介な問題も必ず妥協点、一致点が見出せると私は信ずる。日韓関係も例外でない。両国の間柄が真の善隣友好の関係になることを願わずにはおれない。そのため私は私の立場で少しでも役立ちたいというのが今の心境である。

アフリカ駐在時代の記録がわりの短歌です。
「貧国の故に悲しき話多し、されどアフリカ 人皆同じ」
これが商社生活三十年の実感である。
(高校11回)



中学関東同窓会開かれる

小松中学関東同窓会の総会が去る9月21日夜、東京駅八重洲口前のホテル国際観光で声大?に開かれた。

今年42回生学年が幹事役であったため、同回の亀淵迪氏が司会役で、北村栄昭氏が幹事長挨拶を行った。

経過報告と会計報告の後、三森良二郎氏(21回)が『最近はこの会に出て、この役を仰せつかる年頃になりました』と乾杯の発声をされ、その豊饒ぶりに会場全体が一段と活気づいたのです。

宴が盛り上がったところで、本年幹事の寺本信行氏が例の赤地に白の校章と横線4本を配した母校の応援旗を打ち振って校歌斉唱を指揮し、続いて北山盛久氏(34回)を団長に「門出の歌」を高吟した。

そして、次回の幹事学年を43回生(幹事長金田一郎氏)に押し付けるとともに、来年は7月9日(土)に帝国ホテルで開かれる「関東小松同窓会(中学、県女、市女、高校の全体会で3年毎に開催)」

に挙って出席すること、明後年の5・6月頃に中学会を開くことを酒議?一決した。

最後に、大阪から特別参加の寺本明夫氏(兄上で本年幹事の寺本氏に先約パーティを無理やりキャンセルさせられて出席とのこと)を迎え49(高4)回生グループ発声による「三本締め」で愈々の健勝と再会を誓って散会した。

お願い 明年7月9日帝国ホテルでの関東小松同窓会に地元からの多数の友情参加を心からお待ちいたします。
(中学46回 本谷記)



講堂は今もかわらず

みどり会便り (旧市高女)

みどり会総会(旧制小松市立高女21回卒までの会員。毎年開催)は8月22日小松グラウンドホテルで開催されました。先ず前会長故徳田美代子氏(1回)を偲びつつご冥福をお祈りし黙禱。会務会計報告に続いて役員改選に移りました。

◇会長 中出和子(16回)
◇委員 湊道子(11) 泉他恵子(15) 村田千鶴子(17) 橋本美枝子(18) 山口富美子(19) 北村節子(20) 三島明子(21)

を選びました。昼食を囲み年ら集会に小半日を通しました。出席は18名。(泉・橋本)



ボート部女子ダブルスカル || インターハイ優勝 ||

八月八日に埼玉県戸田漕艇場で全国高校総合体育大会(インターハイ)のボート女子ダブルスカルの決勝戦が行われ、本校3年の高田陽子さんと金井由紀乃さんのペアが、二位に二秒半の差(半艇差)をつけ、千mを三分五七秒三八でゴールし、見事優勝した。

インターハイ優勝は、高校22回卒業生の北野勉さんの陸上八百mに次ぐ本校史上2回目の快挙。

2人は最初から優勝するつもりで試合に臨んでいたといい、その自信は毎日の豊富な練習量からくるものであったという。「日焼けしたかったから」、「珍しかったから」



ボート部に入学したという2人にとって、この日の感涙は生涯忘れられないものとなった。

最近、国際化が大切であるとか、国際化しなければいけないと当然のことのようにいわれているが、このことについて十の観点から考えてみたい。

一番目は、国際化と外国語の関係で、国際化というのは外国語を懸命に学ぶことなのかという点である。外国語を学ぶ場合、日本語で考えてその内容を外国語で表現することが大切なので、英語でものを考える必要はない。深い思考はやはり「母語」、日本語でしかできない。

二番目は日本は島国で、今まであまり外国人と交流してこなかった、だから、今後は早く国際化しなければいけないというのには本当なのだろうかということである。しかし、歴史的にみると、むしろ日本人は海外、アジア大陸、朝鮮、中国、南方諸島と密接な関係を持ってきた。そして沢山の外国の要素を受け入れてきている。また、戦前から絹織物などを世界へ輸出してきたのである。国際的な結びつきは昔からあったのである。

三番目は、島国だから、外国人もあまり日本へこなかっ

た。日本人も外国へ行かなかった。今は交通も便利になったので、国際交流を活発にしなければいけないといわれているが、このことはどうであろうか。朝鮮、中国などからは沢山の人が日本へ来て私達のまわりにいたし、今日、アジア各地から、ロシアあるいは他の国から沢山の人が日本へ来ている。日本は島国で孤立していたのではない。外国と戦争をしてひどいことも

創立九十四周年記念講演 要旨

生活の中での国際化

一橋大学教授 竹内 啓 一

した。また、今日、親方日の丸という形ではなく、沢山の人が外国に行つて本当の国際交流をしているのである。

四番目は、日本は言語とか文化の面で非常に例外的な国である、このことはどうだろうかということである。国家と民族の関係からみた場合は特殊といえるが、日本の文化がみな特殊で、外国人には理解できないというのは間違っている。文化には言語とか、

表現手段といった違いをこえて共通に理解できる普遍性がある。

五番目は、日本人は差別されている。いかに工業化を進めようとも有色人種だから差別されるといふのはそのまま受け取つて良いかどうかという問題である。残念ながら世界の人は差別意識を持つてゐる。われわれは差別される側であると認めてそれなりの対応をしなければならぬ。

しかし、その前に、私達自身が人種的偏見を持っていないか、他の国の人たちを差別していないかどうか反省する必要がある。

六番目は、日本は今や世界のトップクラスの経済的に豊かな国になったといわれているが、本当に豊かになったのか、あるいはそれは名目的で実際は貧しいのかという問題である。日本は世界でもトップクラスの所得水準になった

といわれているが、少しも生活は良くなっていない。一つの統計数字ではなく、経済全体で考えていかなければいけない。失業の問題なども含めて貧しいか、豊かなのかということを考えなければいけない。

七番目は、日本は明治以来、西洋のことを学んできたが、それに比べて外国人は日本のことを何も知らないといわれているが、このことも反省しなければならぬ。今は逆に、

外国の人が日本を知っているほどには日本人は外国のことを知らないとい

との方が真実である。われわれは外国のさまざまな情報について、本当に知っているのかどうか考えてみる必要がある。

八番目は、国際化時代だから、外国に行つたら、外国のやり方に全てしたがわなければならないといふことをうのみにしてよいのだろうかということがある。これからは自分を主張することが大切で、郷に入れば郷にしたがえとい

うのではこちらの主張は何も出てこない。表現しないかぎり相手は理解してくれない。主張しあってそれぞれ譲るべきところは譲り、相手の立場を尊重しあうことが大切なのである。

九番目は、これからも国際化はどんどん進んでいくし、国際化は良いものであると言われているがこのことはどうなのだろうかということである。われわれ日本人は今までも外国のことを必要がある場合は関心を持ち、必要がある場合はそれを吸収することを続けてきた。それがそのまま続くことであつて良し悪しの問題ではない。国際化といふのはしなければいけないといふような問題ではない。

十番目は、この十年ほどの間に、本当に日本は国際化したのかどうか、国際化とは本当は何なのかという問題である。日本は今、国際化と騒ぎたてなくても当然の歴史の継続としてやってきていたが、戦後、ヨーロッパの国は安い賃金の外国人労働者に来てもらうという型で外国人を大量に入れた。日本はそういう場合、逆に工場を外国へ持つて

いつてしまった。観光客などもまだまだ欧米諸国にくらべれば少ない。そういう点では、まだ国際化と騒ぎたてていない国よりもはるかに国際化していないといえる。

現実には急速に変化している。国際化はどうなるのかわからないが、大切なことはどんなことがおこっても、正しく判断し、それに正しく対応するだけの柔軟な考え方を身につけていくことであろう。

＊ ＊ ＊
(昨年十月八日、創立九十四周年記念講演会が開催され、竹内啓一先生が在校生に「生活の中での国際化」と題して講演された。

竹内先生は小松高校を昭和26年に卒業され、東京大学・ミラノ大学で学ばれた後、国際文化振興会職員などを経て、現在は一橋大学教授として活躍しておられます。その間、世界各国の大学でも客員教授として後進の指導にあたられるなど国際人として広く活躍を続けておられます。専攻は社会地理学、地理学史、地理思想史。著書「世界各国地理」訳書「都市と社会的平等」、「現代地理学の論理」など。

余生を楽しむ

中山佐一郎

雨さえ降らなければ毎日大を連れて天守台上を一廻りするのが習慣になってしまった。梯川の堤防を通り石田橋まで行って丸の内町から天守台へ。校庭をぬけ松任町の自宅までのコース。道々の雑草や小動物を観察しながら歩くのがとても楽しい。四季の移り変わりを毎日満喫しているのである。また天守台上からの見晴らしも格別である。白山の姿を今日はどうだろうかと、いつも眺める。校庭では体育に興ずる高校生の元気な姿も見られる。そして、そんな時代の自分を思い出す。

十二月だというのに久しぶりに太陽が出て校庭のクヌギの大木の樹液にヒメアカタテハ(蝶)が来ていた。十一月には当地では少ないスミナガシやヒオドシチョウも見られた。クヌギの横のムクロジには熟した果実が沢山ついていて、自然観察は本当に楽しいものである。

昨年私は中野孝次氏著の「清貧の思想」を読んで共鳴した。最近、続刊された「清

貧の生きかた」を読んでその思いを更に強くした。人間の本性は地位・財産・名誉等に左右されるものではないと中野氏はいつておられる。

報いを期待しない自己研修こそ人の道ではなからうか。伝教大師の言葉といわれる「一隅を照らす人」が現在の私の目標である。謙虚に毎日を楽しみながら余生を送りたい。(中学24回)

小松ことばを科学する

殖生 知磨

第5号で「小松方言の語源」に触れましたので、ここに、具体例を数件述べさせて頂きます。

- ① 舟の中にたまった水をアカという。アカは印欧語で「水」。佛前にお供えする水もアカ(方丈記)。国語化したアクア・ラングは(水・肺)の意であり、潜水用の酸素ボンベ。②「ノッポな男」のノッポを大言海では「伸び坊か?」とおっしゃるが、「ノッポ」、「バッチをはいて」、「おテラ(寺)(韓語チオル)」などのカナ部分は朝鮮語。③「ばつちやめろう」は「ハスハ(蓮葉)メロウ」の約転である。

白峯画会と松籟

山本 佐一

(ハスハ) ↓ (ハッシャ) ↓ (語頭のハは強勢有声音化して) ↓ バツとなる。④「ぞんざいな」。大言海には「粗雑」か、或は「存在」(アリノママ)の意か。と躊躇して居られるが、「粗雑」の転は愚案と一致。「雑」の大陸音はチャップだから、「サヒ」「サフ」の系統である。その例、「雑巾」(ザフキン)。「雑木林」(ザフギバヤシ)など。粗雑(ソサヒ)が有声化する時、「ゾンザヒ」となる。(ザ)(Z音)の前では「n音」が発生するのは音韻変化の一般律。ニッポンとジッポンとの近似性の如く。⑤「まざらでもない」は「先づは『あらず』でもない」の約言である。「大言海では「マサシク」、広辞林では「満更」となっているが、「隔靴搔痒」の思いである。趣味の方言漫歩の一端でした。(中学25回)

中学へ入学した大正十三年は、ラジオも普及していない時代で、娯楽は映画位であった。当時ハッチマークレイランドという活劇の主人公がいて、生徒に人気があった。天守台の石垣をよじ登るハッチ取りの生徒が出る始末だった。凶画の高橋茂勇先生はハッチそっくりだったので、忽ちハッチなるニックネームがつけられた。翌十四年先生の肝煎りで、生徒の運営する白峯画会が誕生し、毎年展覧会が催された。二年生の時佐野保先生が赴任され、英語を担当された。先生は文学者でもあり、高橋・長坂両先生と同人誌「三人」を刊行された。当時としては異色な出来事で、生徒にも影響を与え、先生の指導で「松籟文芸会」が誕生した。佐野先生から「君も入会しないか」と誘われ、「まだ猿飛佐助の方が面白いから」と返事し、皆から笑われた記憶がある。学校図書館で読んだ本といえば、愚石涙香の「噫! 無情」と「巖窟王」位のもの



で、当時高名だった芥川の名
さえ知らない晩生であった。
質実剛健の校風に新風を吹
き込んだ両先生を時折なつか
しく思い出す今日この頃であ
る。(中学26回)

詩

あの過ぎた日

古田 のぶ

退職後 孫守も峠を越した
ふと 心の空間に あの人が
浮んだ
好きで 好きで 大好きだった
言葉が口からこぼれそうだった
あの過ぎた日
恋と現実とはと割り切り
人生のスタート台に登った
部厚い 部あつい
手紙がおそかった
泣きながら 燃やした
あの過ぎた日

青春の炎は 燃えつきず
心のすみに 住みついた
あの過ぎた日
この清い想いを 人生の宝と
して

紫色のフクサに包み
心のダンスの中 そっと……
(県女33回)

随想

中山 隆

一、小松中学入学は昭和二年
四月。真新しい制帽、制服、
革靴に白いゲートル。憧れの
品々だ。国府村の僻地から二
里の砂利路を通学用に買って
もらった新品の自転車を通学
した。

二、校門の横に門衛があった。
服装係の先生が帽子の白線・
尾錠、服の襟ホック・釦・ゲー
トルなど点検された。毎朝の
登校時緊張の瞬間ではあった
が無事に校門を通れば、そこ
は修学・心身鍛練・人格形成
の道場であるという認識と心
構えが自然と身についたよう
に思う。

三、校長先生は修身を教えら
れた島田敬恕先生だった。直
接教室で警咳に接した先生方
の一手一投足は勿論、各教
科の授業の合間に心にしみた
片言隻句の教訓は未だに鮮明
に脳裡に在り、卒業以来今日
まで私の生きてきた人生訓で
あり、箴言となった。

四、四年・五年の上級生は威
厳があり、心から畏敬してい
たが、前夜予習中難解な数学
の問題は、翌日早朝始業前に

薄暗い柔剣道場入口の狭い板
の間で丁寧に教えてもらった。
子供心にも内心強い憧憬と尊
敬の念を一層強くしたものだ
た。上級生が下級生を慈しみ、
下級生が上級生を敬愛する小
松中学の麗わしい伝統は、今
日小松中学同窓会に結集され
ている。

五、私は当年八二歳の老翁。
脚腰・耳目健在。豊饒として
存在。これ偏に長命だった
両親に負うところ大であるが、
中学五年間自ら好んで夏は陸
上、冬は剣道に励んで心身を
鍛えた。

高校・大学と四〇有余年の
教師生活を終えても、休む暇
なく公私の役職に引き出され、
寧日なく動き廻り、席の温ま
るとまがない。このことが
私にとって即健康長寿の良薬
となっている。

六、政・官・財・学術・文化
など多方面に幾多の俊秀を輩
出した栄光と伝統の光輝ある
小松中学で、よき先生方にめ
ぐまれて学んだことは、私に
とってかけがえのない喜びで
あり誇りである。心から「あ
りがとう」と言いたい。

願わくは後に続く後輩の若
き学生諸君は、先輩達が築い

てきた栄光を護持し、更に光
輝あらしめ、小松中学の核と
なっている質実剛健の精神を
堅持して、初志貫徹に邁進さ
れるよう心から祈念して筆を
擱く。(中学29回)

短歌

霜月

松崎 茂夫

明けぬれば八十五才我ながら
高きよはひとなりにけるかも
霜月に入るや入らずや襟巻き
を離せぬ爺となりにけるはや
八十五才この老いながら有り
難や夕餉の酒の衰へ知らぬ
(中学24回)



吃音と私の人生

喜多 庄助

私は少年期に吃音という言
語障害のために生きる望みを
失う程に苦しみ、小学校高等
科を卒業してから叔父さんの
勧めで金沢中学校二年に編入
し、その頃吃音矯正に死物狂
いで取り組み、漸く前途に光
明を見出した頃、小松中学校
四年へ転入し、早速弁論部に
入り、県下中等学校弁論大会
に出場する等、大勢の前で発
表する力をつけるために自己
を鞭打ったものです。

その後石師卒後昭和十二年
から四十年間教職に就き、傍
らボランティアで五十年間夏
季吃音矯正講習会を開き、延
べ一六〇〇名位の吃音者と共
に歩んで来ました。

昭和五十二年三月稚松小校
長を最後に定年退職してから、
加賀八幡温泉病院言語療法士
として失語症患者と接したり、
土居原町公民館長(二十五年
間)で地域サービスを行った
り、市俳文協理事として時雨
会、北国文化センター俳句教
室、稚松北枝会に所属して各
層の人との出会い、吟行での
自然との出会い、そして新鮮

な出会い、そして新鮮

で余韻を伴う言葉との出合いを楽しみ、作句のために頭をひねり、句書の読解に励んだり、更に陶芸と菊作りと二百坪の畑作りに第三の人生を膨らませていく。

陶芸は十年余り前から高齢者給付教室で九谷の五彩に惹かれ、窯出しの時の胸のときめきに若返る思いを繰り返し、菊作りは大菊から福助まで三十余年間苦労している。

大無量寿経に「独来独去、無一随者 身自当之 無有代者」とあるが、人間は元来孤独な者であるが、色々な人々と連帯し、支えられて自己を充実させ、生き甲斐を以て生涯学習に取り組み一生を本生として生きたいと考えている。

「禍を転じて福とする」 吃音という障害が私の人生を変えて呉れたと回顧している。「余生とは言わじ夏草刈倒す」

(中学32回)



ありがたき心の故郷

林 滋

終戦の僅か三か月前に、父が戦死した。母と弟妹三人の母子家庭には、進学など論外で、友人の励ましもあって一年間は通学したものの、新制高校一期生となる特権行使できぬまま、級友と別れて社会に出た。

しかし、そのおかげで最終学年は、小松中学校最後の生徒会長として、先生方の困惑をよそに勝手気儘な学校生活を過ごせたものだった。

現役時代に、農繁期長期欠席、浜佐美での飛行場建設、小松製作所への学徒動員などで、まともな学校生活を送られなかった償いか、それから末弟の三年間、長女・長男の四年間と、PTA役員の役割が与えられた。学校にご縁があつて、よく学校の内外を散策させていただいた。

とりわけ用務員室には、卒業後約四十年も、小松に出るたびに立ち寄って、「おばさん」の笑顔を見て帰るのを常としていた。そのおばさんから『娘さんなら、いつでもお嫁に行ける

わね』といわれ、野球部マネージャーにはまりこんでいた長女も、今では一児の母。三年の体育祭に副団長役で声を嗷らしていた長男も、それが縁で、七年ぶりに小松勤務となり帰郷したのを機に、二年後輩の娘さんと婚約、来年には結婚出来ることになった。

先日泉丘高校百年祭に三代家族卒業生の紹介記事があつたが、私も出来ることなら、孫にもこの素晴らしい学校で、青春時代を送らせてやりたいなと想っている昨今である。

啄木に倣うならば、「小松高校にむかいて 言うことなし」であろうか。

(中学46回)



旧校舍

日々記憶

藤田久仁子

県女22回(2ならびの会)の同窓生83名は、懐かしいポブラの校舎を巣立ってより、60年の歳月が経とうとしています。毎年幹事の骨折りで級会を続けています。今年も6月19日粟津温泉にて旧交を温めた処です。

学窓時代はなかなかの猛者振りを発揮し、級全員が柴原教頭先生に居残りをさせられたり、新任の体操教師八田実先生の授業をポイコットして意気揚々としたものです。

今となっては若気の至りと汗顔の思いです。又、昭和八年の福井大演習御親閲での感激、水泳部の明治神宮プールへの出場等々、思い出はつきません。

今の心境を一言のべたいと思います。縁あつて木場潟湖畔に住む私は、坊主としての日々を務めさせていただいています。来し方を思えば青春時代は自分の分を尽くし真実一路を旗印に邁進してきましたが、今この幸福はと思えます時皆様方のお力添えがあつたの自分であつたとつくづく

思うようになりました。先日小松教区の伝導標語を拝読させていただきました。

嬉しうもない。ありがたもない。ありがたないのをくやむでもない。

浅原 才一

私なりに考えますと、自分は何という食欲な煮ても焼いても喰えない人間であると、味わらせていただきました。

煩惱具足の身ですので日々が四苦八苦の生活ですが、開法の日を重ねて生かさせていただいている喜びをかみしめたいの思いで一杯です。

(県女22回)

筆の流れるままに

須谷 照子

今年は卒業50年というので故人の法要を盛大に営んだあと、会を法師旅館に移し、こどももまた、盛大にクラス会が開かれた。

「ひとりでは寂しいから」といわれる尾坂先生のご希望

に応え、遠来の友という理由で指名された私は、減多に泊ることができない特別室で快適な一夜を明かすことができました。

栗津温泉は、かつて女学校時代をすごした想い出の地である。

当時はなぜか大雪に見舞われることが多く、交通がマヒするたびに一日がかりで雪道を歩いて登校した。いまから思うと涙ぐましい光景であるが、男子と仲むつまじく歩くことができたのはこんなときくらいであつたらうか。

「男女七歳にして席を同じくせず」の時代であつた。おもえばわれわれ大正っちは、学童期からファッションにかりたてられ、青春は戦場と銃後にそれぞれの役割を演じてきた。

いかなれば、人生の哀歓を若くして知り得た世代でもある。

女学校を卒えると赤十字に学んだ私は、やがて応召という名のもとに異国の海をいくたびか往來した。

そしていま、かつて椰子林でながめた月を山荘の友としながら、いつのまにか降りつ

もった深い雪に、残照の愛しさをおぼえるこの頃である。

(県女31回)

みどりのわ

中出 和子

天・地・人と大きく変動している世紀末。みどり会(旧制市女同窓会)にとりましても、一つの大きな悲しいできごとがありました。それは通算三十一年間に亘りみどり会会長をつとめられた徳田美代子様がお亡くなりになった事です。六月十九日御葬儀の折には、小松高校校長、小松同窓会会長、各役員の皆様、みどり会会員の方々のご参列を頂きました。紙上をお借りし、厚く御例申し上げます。

そのため、一ヶ月後に迫る小松同窓会総会に役員報告の事もあり、直に私達の役員会を開き、取るものも取敢えず、新会長を選ぶ事になりました。そして協議の結果、故人のご意志もあり、各役員からの協力をするからとのお約束を得まして、しばらくの間、みどり会会長の任を私がお引き受け致しました。

戦後の学制改革で合併された旧制小松中学、県女、市女

現小松高校と、合流しての小松同窓会の中の市女部(みどり会)は、歴史も短かく、卒業生の総数も少なく、また増える事のない私達ですが、みどりの糸のわに繋がって楽しく生きてゆきたいと思えます。ここに、前会長のお心に報いる事と、私自身の歩んだ足あとを大切にしながら努めて参るつもりでございます。どうぞよろしくご協力をお願い申し上げます。(市女16回)

若き日の思い出

西部英次郎

私達が小松中学に入学した頃は軍国主義華やかな時でした。入学試験の最後には一人ひとり校長室に呼ばれ「当校に入学して将来何になるのだ」と言う校長の口頭試問が有りました。当時の事ですから答は異口同音で「立派な軍人になりお国の為尽くします」でした。ドア一枚の室内の話が全部聞きとれたものです。

私の前に今は故人で戸井孝友君が居ましたが、彼の答は当時としては驚くべき発言でした。「演劇が好きで将来は早稲田大学に進み演劇で身を立てたい」との事でした。彼はその言葉通りその道に入り映画監督になったと聞いて居ります。私はその頃パイロットになりたいと常に思っていました。それで一年生の頃だったと思うが、金井三郎君(故人)と一緒に京都へ航空機乗員養成所(民間航空のパイロット養成)の試験を受けに行きました。それも親に内緒で受験したのです。一応パスしていいよ入学の手続きの段になって、親の大反対で断念さ



小松高校授業風景



せられました。その頃は戦争の真つ最中で死に行くのも同然だと、どうしても許してくれませんでした。無念至極で悔し涙を流したものでした。

私の希望は年月が経って別のかたちで娘が実現してくれました。娘が中学生の頃テレビで「スチュワードス物語」と言う番組が有りましたが、それを見てどうしてもスチュワードスになりたいと言いつつ懸命の努力で遂に日本航空の試験に合格しました。その時も口頭試問があり、受験した理由に「父が実現出来なかった事を私が是非実行したい」と言ったそうです。親子二代の願望が達成出来、私の自慢の一つになりました。

(高校2回)

俳句

弥生くる

山 たけし

艶やかな炭の折れ口弥生くる

木蓮の夜重たくて散りにけり

読みさしのカラマゾフあり炬燵酒

(高校3回)

母へのレクイエム

作本枝美子

平成五年十月十九日、母は九十二才の生涯を眠むるが如く静かに閉じた。

明治三十四年生まれ、激動の時代を生きた母の一生は正に「守りの一生」であったと思う。頑なにまで、自分の家、自分の家族の枠から出ようとはしない人であった。それに反して私は専業主婦に満足出来ず、いまだに可能性を求めていたがたしている。自分から苦勞を求める私の生き方は、母には不本意だったのかも知れない。

「わずかの娑婆なのに、そんなにひどい目にあわんでも、もっとゆっくりせいや。」が私に対する母の口癖のようなものであった。私がどんなに自分の仕事が好きで、それが生甲斐であっても、その裏で、時には生みの苦しみを味わっている事を知っていたのだと思う。

小松高校時代は器械体操クラブに所属していた私は、国体やインタハイにも出場して、父には少しは良い思いもさせようだったが、その分よく

怪我をして、母には人一倍心配をかけたものだ。気がつけば、いつの間にか、高校時代の体操クラブの延長線上を歩いている。「これからは肩の力をぬいて、ゆっくりするね。」母の遺影につぶやく昨今の私である。

母が逝き、日が経つにつれ、悲しみも深まり、かけがえない大切な人を失った思いがあふれてくる。晩年の柔和そのものの母よりも、何故か、戦後の混乱期に、家族の食料を確保するために、身を粉にして働いていた母の姿が、セピア色の彼方に、輝いて、私の臉によみがえる此頃である。

(高校8回)

レコーディング

矢野としあ

高校時代は歌と合唱は趣味のつもりだったが、好きが高じて声楽と合唱指揮を仕事にするようになってしまった。

九年前、作曲家の石井敏氏の勧めで合唱のLPレコードを出した。レコーディングは早朝から夜まで九二日間の作業だった。この日のために約一年間練習してきた合唱団を一曲毎に数回ずつ指揮し、OKが出ると次の曲へ移る。

二日目の朝、石井氏が手書き楽譜をコピーしてきて、「昨夜作ったのだが……」と言いながら配られた。「突然で練習も出来てないから無理です」と言うのを「大丈夫」と軽くいなされて急遽その曲も録音する事になった。小品とは言え、通して歌うのは不安があり、楽譜をめくる紙の音が入るのもまずいので、仕方なく、何度か練習をしては録音するという作業を楽譜の枚数分繰返した。あとは技術者がテープをつなぐにまかせ、どんな演奏になるかは出来てみないと解らないという甚だ恐ろしい綱渡りをした。

後日編集したテープの見本を私がチェックをした。つなぎ方の組み合わせは幾通りか考えられるわけだが、組み合わせ次第で音楽が良くも悪くもなる。また、生演奏と違いレコードとなると、ちょっとしたウィブラート、音のずれ、雑音などが非常に気になり、編集のチェック作業には大変気を使った。テープはビデオテープを使い、最後にレコード盤にプレスするのである。

11月の寒い日は、情熱に燃えていたあの頃を思い出す。もう今はCDの時代……である。

(高校14回)



青雲の小径



小松高校体育祭

韓国からの報告

加茂 隆夫

近くて遠い国、韓国から報告いたします。

仕事の関係で韓国との関係を持つようになり、零下十五度の厳しい冬も九度目を迎えた。寒いが、空一杯の青空はすがすがしい感じさえする。ソウルの冬が好きだ。

今、世界で一番国際的に危険な地域として、朝鮮半島の韓国と北朝鮮が注目されている。事実、北朝鮮の核査察問題で、日本、アメリカ、韓国の間で見解の相違はあるものの、一発触発の状況にあることは、三国の当事者間では周知のことながら、あまり知られていない。つまり、いつ戦争状態になっても不思議ではない状況にある。それほど、朝鮮半島は緊張した状況にある。

八年前、成楽濬氏（小松中学四十回卒）と龍山高校の校長室で初めて会った。成校長は在日韓国人として日本の教育を受け、戦後母国へ帰りソウル大学卒業後、教育一筋の道を歩まれた。その後、ソウル市教育委員会の副教育監と

して、さらに、韓国精神教育協会会長として、韓国教育行政の中枢に位置し、日本との関係改善に努力された。成先生は不幸にも五年前、ソウル高校の校長室で急死された。学校葬が行われ、参席した。いつも韓国の国民としてのプライドを持ち、しかも世界に生きることでできる韓国人を自分が造らねばならないと熱く話される姿を偲んだ。

また、吉田三郎先生（小松中学四二回卒）は成先生の関係から、日本と韓国の橋渡し役として今もなお韓国の各層の方々との交流をしておられる。

先日、伊藤忠商事ソウル支店で新任の坂井光男支店長（小松高校十一回卒）に会った。坂井支店長は韓国について日本人として見た現状を話された。経済、および政治の世界からの話であったが、世界を視野においての話は興味深いものであった。

かつて、日本の海外戦略として、この朝鮮半島に国家的野望を抱き、占領、統治した事実は、細川首相の弁を待たずとも明かな事実である。この日本統治の三六年間に日本

と韓国との間に埋めることのできない深い溝を作ってしまったことも否めない事実と言える。過去のこととして関係改善にいろいろな面から努力が為されている。しかし、この溝を埋めることは、たやすいことではなく、両国の関係において、常に基本的な問題としてクローズアップされ、お互いの関係を難しくする基本問題でもある。政府間の国際問題のみならず、民間の経済的な関係においてもこの命題は常に問題とされ、ビジネスを妨げる最も大きな問題となっていることも知る人は少ない。韓国社会で、その実態を垣間見たものとして、将来に渡り、その傷を癒すために多くの努力が必要であることを痛感する。

様々な分野で日韓の交流は行われている。しかし、やはり外国である。政治、経済、文化、どれをとっても、「外国」なのである。日本が韓国に対しあまり話題にしたくない過去を持ち、いつまでもその過去にこだわりを持つ韓国との交流はまだまだ時間が必要でありそうである。そうした困難な状況を我々同窓生も

力を合せ、少しでも前進させることができればと願う。（高校18回）

出合い

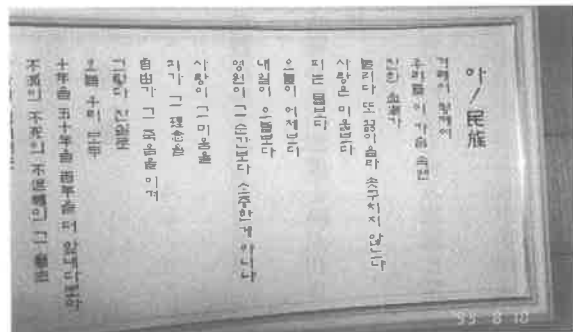
上出美智代

「忙しいなあ」という言葉を、ため息交じりに、いつも口走っている今日この頃ですが、その合い間をぬって、今、楽しみにしているのが、「上村松園」の絵を鑑賞することです。

この松園さんとの出合いは、私が母校のPTA活動の読書会に参加し、奏恒平氏の『閨秀』を読んだ時からでした。この時は、前校長の井口先生がお知りあいという事もあり、著者の奏氏を囲んで松園さんに関するいろいろな話を聞く機会に恵まれました。それからである、同席した友と二人で、松園さんの『追っかけ……』が始まったのです。

二人とも仕事を持っているという事もあり、時間を惜しんでの行動ではありましたが、まずは図書館で資料集め、松園さんを主人公とした小説を読み、映画もみました。

本屋では画集を注文し、古本屋では、廃版となってしまう松園さんの書いた本を、足繁くさがしまわり、二人寄り添って、松園さんの女として、仕



事に対する思い入れ、あるいは子供に対してなどを語り合いました。

「ついに資料も膨大なものとなり、お互いにまとめて独自の資料集を作ってしまった。『ここまですれば、やりすぎだ』。とお互いに言い合いつつ、後はやはり実物を是非見たいという念にかられ、美術館を調べました。最初に足を運んだ時は、もう胸が『ドキドキ』『ワクワク』。対面した時には、ため息、ため息……。」

「わずか一年足らずではありましたが、よくもまあここまで追っかけてと思うと同時に、人生半ばにきて、すばらしい友が出来た事を感謝すると共に、この場をかりて、協力してくれた家族に対しても、お礼を述べたい。」

「お母さんは、今日もまた、がんばるよ……。」

(高校22回)



アメリカ旅行記

西出 則武

大学入学とともに石川県を離れて早くも20年、東京圏在住の方が長くなりました。公務員生活も15年目に近づいた昨年、もう一段飛躍したいとの願いから人事院の行政官留学制度に応募し、今年4月までの5カ月間、一家4人で米国に滞在してきました。

米国では、シアトル、ワシントンDC、サンフランシスコ等に滞在して、地震火山に関する警報等について調査してきました。この分野では我が国の方が進んでいると思われがちですが、米国はこれまでに得られた知見を積極的に活用した発表基準を作成して、実際の地震や火山噴火に対して警報を発表した経験もあることから、国情の違いはあるものの大いに学ぶところがありました。また、ワシントンDCのアパートに兄(崇)が母を連れて訪ねてきてくれたことで、米国滞在一層意義深いものとなりました。

仕事でお世話になった火山学者や子供の学友等との家族ぐるみのお付き合い等の実生活

から米国の良い面も悪い面も見ることができました。特に、全体的な教育荒廃の反面、子供が入学した公立小学校のうちに1年生から日本語など外国語で授業を行うといった我が国以上の教育の一部で行っていることに驚かされました。

我が国の経済的繁栄を国民が充分享受していないことがしばしば話題になります。米国滞在を通じて感じたことは、私の場合、東京への通勤がなくなり、住居の近くに自分の専門と経験が活かせる精神的充実感が得られる職場があれば、米国の生活は決して羨ましくないといいことです。私が米国で接した人々のように、我々一人ひとりが地方の生活の良さを見直して、地方の充実に力を入れること、しかし、決して地方に閉じ込められず、常に国全体に、そして世界に目を向けて生きていくことが、我が国の繁栄を享受する秘訣だと思えます。

(高校25回)

川柳 迎春

中谷 士郎

花鈿清めて妻も初春の顔

古稀われの影確と跳ぶ初日の出

天守台の話も弾み屠蘇に酔う

(中学40回)

本部だより

◇平成五年度小松同窓会総会は、七月九日(金曜日)ホテルサンルート小松で開催されました。出席者は二百七人で、司会は中谷公治氏(高校二十回)が行いました。平成四年度会務報告、平成四年度決算報告、会計監査報告がなされ、平成五年度予算案が説明され、承認されました。その後、懇親会に移り、にぎやかに懇談しました。

◇岐美子ハウエルさん(高18回卒、宝塚市在住)が、『見えてきた日本―私たちの国際結婚』を出版された。英国人との結婚で、いろいろな障害に遭遇した筆者が、真の国際化とは何かを問いかけたドキュメンタリーである。

第8号の原稿募集

◎メ切 本年5月30日

◎内容 自由(在学中の思い出、近況、体験、趣味、旅行記、文芸等)

◎長さ 六〇〇字以内

◎送先 同窓会本部会報係宛

◎発行 平成6年7月同窓会

総会



小松同窓会総会